

## *Between the Acts*とウルフの方法

河 合 清

### I

文芸作品は、それが単独でおもしろくなくては意味がない。

ある作品と同じようなおもしろさを求めて、その作者の他の作品を読んでみることはよく行なわれる。多くの場合一人の作家の作品は同じようなおもしろさをもっているので、期待が大ききうらぎられることは少ない。文芸作品のほとんどが、その作家の名前をつけて売り出されることから考えても、作家名がブランド名の役をはたしていると考えていい。それでも、ある作家の一つの作品が、同じ作家の他の作品によって価値を左右されるとは思えない。又、作家についての知識や作品が書かれたいきさつについての知識なども、その作品の価値に影響を与えない。というよりも、そういったものに影響されないものをもって、その作品の価値とするべきだと言った方がいい。作品を鑑賞するのに必要な外部の情報があるとするなら、それは作品の中に含まれているべきだったのだ。

### II

文芸作品の創作者が、言語の持つ性格に大きな関心をよせることはありうることだ。Virginia Woolf もそうした作家の一人だと考えられる。

今までのところ、文芸作品は文字をならべることだけで作られてきたとっていい。そこで、言葉が何を伝えることができ、何を伝えることができないかということに作家の関心が向くことは、自然なことだと思われる。ウルフの作品のうち、*Night and Day*, *Jacob's Room*, *Mrs. Dalloway*, *The Waves*, *To the Lighthouse*にはこの関心が見られる。*Night and Day*では、この関心は作品の内容としてあつかわれる。登場する人々の間での意志の伝達の問題が、この作品の主題といってもいい。特に、Katharine HilberyとRalph Denhamの間での、言葉での伝達が、最も問題になる。

残り4つの作品では、この関心は作品の内容としてではなく、作品を語る方法としてあらわれる。つまり、言葉の問題は作家と読者との関係に持ちこまれる。

*Night and Day*で、Ralphが描いた、まわりに炎のついた点をKatharineが見た時の様子は、4つの作品でのウルフと読者の関係を示す。

"I like your little dot with the flames round it," she said meditatively.

Ralph nearly tore the page from her hand in shame and despair when he saw her actually contemplating the idiotic symbol of his most confused and emotional moments.

He was convinced that it could mean nothing to another, although somehow to him it conveyed not only Katharine herself but all those states of mind which had clustered round her since he first saw her pouring out tea on a Sunday afternoon. It represented by its circumference of smudges surrounding a central blot all that encircling glow which for him surrounded, inexplicably, so many of the objects of life, softening their sharp

outline, so that he could see certain streets, books, and situations wearing a halo almost perceptible to the physical eye.

(p. 522)

Ralph と Katharine が見ている炎のついた点の一つのもので、Ralph はそれが同じものだと感じている。彼はそれが他の人に対して何の意味ももたないと思っていた。けれど、Katharine はそれに意味を見出す。どんな意味を見出したのかは書かれていない。Ralph がそれにもたせていた意味とは違うことは明らかだ。炎のついた点を作家の語る言葉におきかえれば、状況はウルフと読者とのおかれた状況に当たると見ることができるだろう。

Katharine はこのすぐ後、Ralph に言う。

“Yes, the world looks something like that to me too.”

(p. 522)

けれども、この言葉は Ralph と Katharine の見方そのものが一致しているのではなくて、ただ、二つの見方を代表させるものが一致しているだけだ、ということを知っている。そして、それ以上に正確に意味を伝えあおうという彼らの企ては妨げられることになる。

Whether there was any correspondence between the two prospects now opening before them they shared the same sense of the impending future, vast, mysterious, infinitely stored with undeveloped shapes which each would unwrap for the other to behold; but for the present the prospect of the future was enough to fill them with silent adoration. At any rate, their further attempts to communicate articulately were interrupted by a knock on the door, and.....

(p. 523)

残りの4つの作品では、はっきりと伝達するという企ては、ウルフ自身の企てとなるのだ。そしておそらく、ウルフという作家名を多少知られたものにしてしているのは、これら4つの作品に *Between the Acts* を加えた5つの作品であろう。4つの作品はそれらの伝える内容や意味に特徴があるというよりは、むしろ、伝える手段、つまり語られる方法に特徴があると言える。どの作品でも、ウルフの使う方法は基本的に同じだけれども、その方法がどこまで徹底して使われているかには違いがある。

*The Waves* では、この方法は徹底して使われる。そして、この作品はウルフの最大の失敗作と思われる。この作品の中で語られることのほとんどは、読者にはわからない言っている。わからない理由は、方法の性格と関係している。

*The Waves* は、6人の人物が語る言葉からなっている。例外は、日と月と海と砂についての部分と、引用符の後、又は中間にある語った人物を示す部分だけだ。それぞれの部分を誰が語ったかということだけはわかるようになっている。(ただし、名前がわかったということをもって「誰」ということがわかった、とするならばのはなしだ。) 6人の人物はお互いに話をしているように見える。けれど、何について話をしているのか読者に説明が与えられることはない。劇によく見られるように自分のおかれた状況や見ているものについての不自然な告白が長々と続くということもない。語られた言葉だけがきこえてくる。しかも、その言葉は読者に対して語られているのではなく、読者とは無縁の言葉なのだ。

“I SEE a ring,” said Bernard, “hanging above me. It quivers and hangs in a loop of light.”

“I see a slab of pale yellow,” said Susan, “spreading away until it meets a purple stripe.”

"I hear a sound," said Rhoda, "cheep, chirp; cheep, chirp; going up and down."

"I see a globe," said Neville, "hanging down in a drop against the enormous flanks of some hill."

"I see a crimson tassel," said Jinny, "twisted with hold threads."

"I hear something stamping," said Louis. "A great beast's foot is chained. It stamps, and stamps, and stamps." (p. 6)

これらの言葉は、6人の間では意味を持つのかも知れない。けれど読者は、話を立ちぎきする人のように、これらの言葉から少なすぎる情報しか得ることができない。

言葉が何かを伝えるには、語る側と受ける側に何かしらの共通な理解が存在しなくてはならない。共通な理解を語ることができれば、それを語りの中に入れることができるのだから、何か語れないような共通の理解があるはずだ。言葉を交互にやりとりする場合なら、必要に応じてどこかにそれを探そうとすることが可能で、時にはそれを見つけ出すこともできる。でなければ、言葉がこの世に存在して、何かの役をはたしているということはおこらない。

文芸作品を語る言葉の特徴は、その言葉が交互にやりとりされる言葉の一部ではないということだ。自分の語る言葉が「適切に」理解されるかどうか作家が心配することはあっても、それを確認することはない。だからこそ文芸は芸としてなりたっている。

ウルフが4つの作品にとった方法は、誤解を阻止することを目的としている。勿論、一方的に語られる言葉に、受ける側から見た正解があるという、ありえない前提をもとにして表現された場合にだ。前提なしに表現されれば、それは「二種類以上の解釈を許さないことを目的としている」となる。

この目的を達成しようとするためにとりうる唯一つの方法は、何

が作品に書かれているのかについて読者に与える確信を少なくすることだ。ウルフがとっている方法はこの方法だと言っていい。そして、この方法を最大限に進めて書かれた結果、*The Waves* はわからないのだ。作家が方法を選んでいる以上、「わからない」は「わかるべきものがそこに書かれているはずだけれどわからない」ということを意味しない。そこには、わかるはずのことが少ししか書かれていないのだ。

ウルフ以前の多くの文芸作品はそうではなかった。それらは、確固とした確信をもって誤解することができた。もし、作家一人に読者一人という単純な関係で見ると、誤解は「正解」と呼ばれるべきものなのだろう。読者によってなされる解釈が作家によって確認されることはないのだから。

読者が2人以上という場合を考えてみる。読者一人にとっては、この場合を考えてみることは意味がないと主張することができる。「読者とは私のことなのだ」と考えることが可能だから。けれど、作家にとってはこの場合を考えることは必要なはずだ。まさに作家の直面している状況なのだから。

「確固とした作品」を書いた作家達はどう考えていたのだろうか。同じ一つの文字列が複数の人間に一つの解釈をおこさせる、という幸福な奇蹟が信じられていたのだろうか。それとも、作家の仕事は文字を並らべることだけだという真実が強く認識されていたのだろうか。(たとえそうだとしても、ウルフも文字を並らべるだけで作品を作っている。)

過去の作家についてのウルフの見方は、*Night and Day* の Cassandra の William についての評にあらわれている。

“But you’ve shared with me,” Cassandra said. “Why can’t I

share with you? Why am I so mean? I know why it is," she added. "We understand each other, William and I. You've never understood each other. You're too different."

"I've never admired anybody more," William interposed.

"It's not that"—Cassandra tried to enlighten him—"it's understanding."

"Have I never understood you, Katharine? Have I been very selfish?"

"Yes," Cassandra interposed. "You've asked her for sympathy, and she's not sympathetic; you've wanted her to be practical, and she's not practical. You've been selfish; you've been exacting—and so has Katharine—but it wasn't anybody's fault."

(p. 439, 440)

Cassandra に言わせれば、William は Katharine に「共感」を求めた。だから William は自分勝手だというわけだ。作家と読者の関係におきかえて、「共感」をその前提となる「共通の理解」と考えれば、ウルフ以前の多くの作家についての評と見える。

作家達がどう考えていたと思うべきなのかわからないし、又、わかることが絶対に必要とも言えない。読者として、ウルフの見方をそのままとりいれなければならないとは言えない。問題となるのは、一人の読者が他の読者を想定して文芸作品を読む場合だ。

### III

この場合は、誤解は正解と呼ばれないと読者の側が考えている場合だ。

*The Waves* については、問題は解決している。そこにはもともと

と、解けるような何ものかが書かれていないというのが答だった。そして重要なのは、この作品は単独ではおもしろくないということだ。ウルフの方法の特性を極限で示しているという興味をひくかも知れないけれど。

*To the Lighthouse, Mrs. Dalloway, Jacob's Room* については、それらは成功しているように見える。

*Jacob's Room* を例にとってみる。そこには Jacob という名の一人の人物が描かれている。Jacob はウルフの方法によって描かれているのでくっきりとその人物像をおもい描くことはできないけれど、何も描かれていないわけではない。作者は直接に Jacob を描くことはしないで、Jacob のまわりの人間達に彼が与える印象をならべていく。題の示すとおり、Jacob の入る空白を語っているのだ。まわりの人間の一人一人がどのような人間なのかを描くこともしていない。まわりの人間達が Jacob に対して持つ印象は様々で、一致していなかったりもする。まさに現実の世界でおこっているできごとと同じだ。この方法でウルフは、自分自身の判断を表に出すことを避けている。「共感」を読者に要求しないのだ。読者は、Jacob という人物がある人間に対してこのような印象を与える、そういう人物なのだということまではわかる。まわりの人物達をウルフが描写してしまったとしたら、ウルフの方法が使われていることにならない。Jacob の姿は満足いくほどくっきりとはわからないけれど、言葉によって伝えられる限度はここまでだと考えていい。

ウルフ以前の多くの文芸作品の中の描き方と比らべてみればわかる。「共感」を持つことを拒否すれば、それらの作品の中の人物を、作者からのおしつけを感じないで見ることはできない。「共感」を持つことを拒否しないとしても、では何が「正しい」「共感」なのかについて自信を持つことができるのだろうか。「確固とした確信を



もって誤解することができた」と書いたが、解釈している本人が誤解を承知していて、しかもそれでいいのだという最高級の楽しみ方をしない限り、誤解をつづけることは不可能になる。確固としているのは誤解の方ではなくて、作者の描き方の方になるのだ。不信をいだけば自信に満ちた言葉ほど信じられなくなるのだから、描かれたものは描写がくっきりとしていればいるほど疑わしくなるはずだ。疑わしい言葉で堂々と描かれた人物達より、Jacobの方がずっと自信をもって読みとることができる。

*Night and Day* の Katharine の考え方がこの情況に対してウルフのとった方法を説明しているように見える。

“The only truth which she could discover was the truth of what she herself felt—a frail beam when compared with the broad illumination shed by the eyes of all the people who are in agreement to see together; but having rejected the visionary voices, she had no choice but to make this her guide through the dark masses which confronted her. She tried to follow her beam, with an expression upon her face which would have made any passer-by think her reprehensibly and almost ridiculously detached from the surrounding scene. (p. 330)

#### IV

*Between the Acts* は4つの作品に使われた方法で書かれてはいない。そこには神のような語り手がいる。彼は現実の世界でなら同時には見ることのできない複数のことがらについて語る。方法に関心が払われてはいないのだ。

ただ、それには理由を見出せる。それは、この作品の描いている

情況と関わっている。描かれているのは、村で上演された劇と、それを「見た」観客の反応だ。劇の部分には引用符がついていないが、上演された劇の中で役者が語った言葉と見ることができる。観客の反応の部分には、引用符が多い。引用符の内部には神のような語り手も立ち入ることはできないから、引用の部分に注目されるべき部分が集中していれば、神はそれほどの役を果たさない。そして、*Between the Acts* はそのように書かれていると言える。

*Between the Acts* の中で、ウルフは作品を語る上で自分のおかれた状況を描いていると考えたい。

観客が見ているものが劇であるということには、重大な意味があるように思える。劇は純粹に言葉だけからできた芸ではないけれど、その中で言葉が果たす役割は大きい。作品によっては、そのセリフをそのまま文字にすることによって、ある程度その作品を写すことができる。少なくとも、観客の見ていたものの一部分を、解釈をいれずに写すことができる。(勿論、このことは、解釈をいれたくないと感じる人にとってしか意味がない。)もし、観客の前にあるものが言葉を使わない芸、あるいは何かもの、事態だったとしたら、それを言葉で写したものについて、「解釈がはいっていない」と感じることはむずかしいと思える。(それにもかかわらず、例えばビクトリア朝時代の小説の多くは、「解釈がはいっていない」と感じていることを前提としているように見える。もし、複数の人間が一つのもの、あるいは事態を見て、それを全く同じ言葉で写しとるとしたら、この前提は意味をもつかも知れない。逆に言えば、言葉でできた作品を写す場合でも、ビクトリア朝時代の作家なら、それを構成している単語の列をそのまま写しとることをしないで、しかもそれが完全な描写であると信じるのができたかも知れない。危険がなければ、「引用は正確に」という必要はないのだから。「理解する」とい

う単語が存在するからには、語られた言葉を別の語り方で写す可能性はあるはずだけれども、そうするには相当な注意が必要だと、少なくとも現時点の人間は感じるはずなのだ。）

劇が使われることには、もう一つ別の意味もある。複数人間が一つのもの（と感じられるもの）を見ている状況をつくり出すには、小説などの文芸作品を使うよりも、劇を使う方が有利なのだ。

劇の内容は、その観客達にとっては問題となるかも知れないが、*Between the Acts* の読者にとっては重大な意味を持たない。読者にとって問題となるのは、その題の示すとおり、幕の間の観客の反応、そして、劇の作者 Miss La Trobe の反応だ。もし劇の内容を問題にするとすれば、Reason が台を降りた後、劇の中の劇に真理や教訓をさがしてしまう Bertholomew や Giles のように、間がぬけている。

The Scene ended. Reason descended from her plith.

—————

God's truth!' cried Bertholomew catching the infection of the language. 'There's a moral for you!'

—————

A moral. What? Giles supposed it was: Where there's a Will there's a Way. The words rose and pointed a finger of scorn at him. (p. 174, 175)

だから Miss La Trobe がしたことはウルフがしたことだと言うことはできない。けれど、Miss La Trobe がおかれた状況は、ウルフ自身を含めた作家達のおかれている状況をウルフがどう考えてい

たかを示すと思える。

劇が始まる少し前に、観客達は庭に集まって待っている。その時彼等は、「別々に感じたり思ったりする自由を持っていない、とそれぞれの人が別々に思っている」。

Their minds and bodies were too close, yet not close enough.  
We aren't free, each of them felt separately, to feel or think separately, nor yet to fall asleep.

それぞれの観客は、他の観客を意識しているのだ。彼らはそれぞれどう感じてもいいとは思っていない。観客を作家の観客におきかえれば、次のように言うことができる。観客は他の読者と同じ結論にいたらなくてはならないと感じている、と。そして、そうだとすれば彼等は同じ結論にいたりそうもないと感じていることになる。もし自分の結論に自信を持てるような状況なら、相談しなくても、すべての読者が同じ結論にいたると信じていることになるから、自由を持たないと感じるはずがないのだ。

劇がおわった時、観客達は Miss La Trobe の劇がよくわからなかったと感じる。作家の観客にとっても、事態は同じだ。彼等はわからないと感じなくてはならない。なぜなら、彼等は同じ結論にいたらなくてはならないと感じているから。しかも、別々に。相談なしに同じ結論にいたる自信がない限り、彼等はわからないと感じなければならぬはずだ。でなければ、もう一つ別の方法しかない。何かの結論にいたるのだ。そして、それ以外の結論はまちがっていると断言すること。ウルフの前の時代の作家は、読者にそうすることを要求していたかも知れない。

Miss La Trobe の観客はそうしない。彼等は困るのだ。観客が帰ろうとしながら話をしている中で、ある声が言う。誰が言ったのか

は書かれていない。

And if we're left asking questions, isn't it a failure, as a play? I must say I like to feel sure if I go to the theatre, that I've grasped the meaning... Or was that, perhaps, what she meant?... Ding dong. Ding... that if we don't jump to conclusions, if you think, and I think perhaps one day thinking differently, we shall think the same? (p. 233)

意味をつかんだのだと確信したいと語る時、語った人間は意味のつかみ方を自分で指定している。それに合わないものは、意味がつかめないものとなるのだ。指定されたやり方にもとづいて、知りたいと思うことが欠けていれば、作品は「意味のつかみにくいもの」となる。4つの作品はウルフの方法によって書かれていた。ウルフの方法は複数の読者が違った結論にいたることを阻むかわり、読者に与える確信を少なくするような方法だった。だから、4つの作品は、この声に失敗作ではないのかと言われた Miss La Trobe の劇のように、声の主と同様の望みをもつ読者にとっては失敗作だ。けれど、ウルフの作品は、全く確信を与えないわけでもないし、何もそこに書かれていないわけでもない。各々の読者がどれくらいの確信を求めるのかによって失敗作であるかどうかが決まる。

*The Waves* について言えば、おそらくどんな読者もその与える確信について十分だとは感じないだろう。この作品を成功と考える人達は、「想像することを求められている」と考えながらこの作品を読む人々なのだろう。

*The Waves* 以外の3つの作品について言えば、十分だと感じる読者もいるだろう。確信を少なくすることは「誤解」を阻止するという目的に対しての手段だったのだから、「誤解」を放置することと

の差しひきで考えて確信が十分であると感じられれば、それでいいはずなのだ。芸人の技によって確信だけを多くすることができれば、「想像することを求められている」と考える読者にとって以外は、それにこしたことはない。けれど、文芸をなりたたせているものである言葉、の性質から見て、その両方を満足させることはできそうもない。

Miss La Trobe は「観客なし」に劇を書きたいと考える。(p. 130) 彼女の置かれた状況が彼女にそうさせたのだ。しかし、彼女は観客なしに劇を書きはしない。むしろ、そのようなことを考えつくこと自体、観客をより意識していることを示す。「共感を要求する」作家達の方が、実はずっと「観客なし」に近い状態で作品をつくっているのだ。Cassandra 風に言えば、彼等は観客に要求を出すのだから、ずっと自分勝手なのだ。彼等の要求を受け入れない者は彼等にとって観客ではないのだから、彼等は「観客なし」に近い状態で作品を書いているといえるだろう。

Miss La Trobe をウルフにおきかえることができれば、ウルフの方法が読者を意識する方法であると言える。では、読者とは誰のことを指すのだろうか。Miss La Trobe にとってなら、観客とは彼女が向い合っている人々のことを指すのだろう。少なくとも、1回の上演について言えば。ウルフにとっては、読者とは作品成立後にその作品を読むだろうすべての人々を指す。読者の中には様々な望みを文芸作品に対して抱く人がいるだろう。Etty Springette のように望む者もいるだろう。

How difficult to come to any conclusion! She wished they would hurry on with the next scene. She liked to leave a

theatre knowing exactly what was meant.....

けれど、この望みが実現可能だとして抱かれたものでないことは明らかだ。もし実現可能だと考えていたとすれば、Etty Springette は“exactly”という単語を抜いていたはずなのだ。

文芸作品に対して持っている望みは様々だとしても、もっと浅い所で共通であるような読者を、ウルフは想定しているように見える。Mrs. Swithin のビクトリア人達についてのコメントが、ウルフが読者について想定しているものを表現しているように見える。ビクトリア時代が選ばれているのは、おそらく偶然ではないだろう。

‘The Victorians,’ Mrs. Swithin mused. I don’t believe’ she said with her odd little smile, ‘that there ever were such people. Only you and me and William dressed differently.’

You don’t believe in history,’ said William. (p. 203)

The Victorians が文芸作品の読者として使われていると見れば、ウルフの方法はウルフ以前の時代の方法よりもすぐれているという自信をウルフが持っていたことになるだろう。歴史があると思わないのなら、ビクトリア時代の方法は、ビクトリア時代の読者を対象にした方法としてはすぐれているのだ、と主張することはできない。ビクトリア人という人々がいたという考え自体が否定されているのだから。

作家の側がどう考えていたかは、それほど問題ではない、どう考えていたと思うべきなのかということも重大ではない。現代の読者がどう考えるかが重要なのだ。私にはビクトリア人という違った人々がいたとは思えない。少なくとも全てを社会の側に押しつけて考えることはできないと思っている。もし全て社会に理由を見出せるとするなら、自分の行動とその理由について考えることがまずな

されるべきことであるはずで、そうすることによってビクトリア人と自分に共通するものをもって人間の性質と考えることが可能になるはずだ。社会の問題は Mrs. Swithin のいう服のちがいの問題以上のものではありえないように思える。だから、複数の方法に同じ次元で優劣がつけられると思える。文芸に限らず芸について考える時、優劣をつけるという行為は欠かせないはずだ。

そしてウルフの方法はそれ以前の方法よりすぐれていると思える。

Katharine の考えで述べられるように、ウルフは「見つけられる唯一の真実さは、自分自身感じるものの真実さだ」ということを前提としている。作家に限らずどんな人間が語る時でも、受ける側から見ればこのことを前提にしているのだ。ただウルフ以前の作家の多くはこのことを前提としていることを認めないで「共感」を要求しているように見える。

理解できるものが少ないと言うなら、それは Mrs. Swithin の言うように、Shakespeare についても言えるだろう。誤解しないように読むとするならばの話だが。

'D'you get her meaning?' said Mrs. Swithin alighting suddenly.

'Miss La Trobe's?'

Isa, whose eyes had been wandering, shook her head.

'But you might say the same of Shakespeare,' said Mrs. Swithin.

(p. 204)

## V

Miss La Trobe の劇には最後の場で鏡が登場する。鏡の登場は神のような声によって報告されてはいない。観客の声によって、彼



らが鏡を見せられているらしいことが知れる。

Look! Out they come, from the bushes—the riff-raff. Children? Imps-elves-demons. Holding what? Tin cans? Bedroom candle-sticks? Old jars? My Dear, that's the cheval glass from the Rectory! And the mirror—that I lent her. My mother's. Cracked. What's the motion. Anything that's bright enough to reflect presumably, ourselves? Ourselves! Ourselves! (p. 214)

観客たちは鏡に写し出される自分自身を見る。けれど、見ているものは、自分達自身そのものではないのだ。鏡にうつっていることを彼等は知っている。

言葉を使って何か語る場合、誤解が生じる原因の一つは、受ける側が語られる言葉の中に自分自身を見ることだ。自分自身を見ていると思わずにそうするからこそ、解が誤解と呼ばれうる。自分自身を見ているのだと了解して見るならば、おそらく語られた言葉は別の作用をする。

ウルフの方法は外枠を意識させる。Miss La Trobeの観客が自分達自身を見せられた時、鏡という枠も見ていたように、ウルフの読者は枠を見せられるのだ。鏡の作用をひきうけるのは引用符。あるいは、引用符が使われていなくても、作家が直接に語っているとは感じられない文章。

枠についての説明が作品中に入れば、それはもう枠の役を果たさない。Miss La Trobeは鏡について何の説明も与えなかったし、ウルフも*The Waves*で6人の語り手について説明を与えることをしない。けれど、すべてが枠の中に入ったとしたら、枠内の出来事が読者に何かを伝えることはないだろう。Miss La Trobeの劇は鏡が全てではなかった。*Jacob's Room*, *Mrs. Dalloway*, *To the*

*Lighthouse* でも枠内だけで全てが描写されてはいない。

Miss La Trobe の観客は、劇が何を意味するのか正にわかったと感ずることはできなかつたにしても、最後まで劇を見たし、そこに何か意味されていると感じたのだ。「正に」でなかつたのは、彼等が「正に」の型をもつていたからだ。Miss La Trobe はその型を使わなかつた。Miss La Trobe が別の「型」を使ったかどうかはわからないが、ウルフは別の方法を使った。その方法をウルフに使わせた状況を *Between the Acts* の観客たちという形で説明しているのだ。勿論、説明されているのは状況だけで、Miss La Trobe がウルフの方法を示していると言ふことはできない。

#### 註

引用はすべてウルフの作品からで、The Hogarth Press 版

*Night and Day* (初版年 1919年)

*The Waves* (初版年 1931年)

*Between the Acts* (初版年 1941年)